



OVERSEAS

Hashemite Kingdom of Jordan

— ヨルダン・ハシミテ王国 —

海外事情



中東のオアシス・ヨルダンの生活



阿部 寛 ABE Hiroshi
株式会社TEC インターナショナル
技術グループ/技術第3チーム

中東のイメージとヨルダン

一般的に「中東」と聞くと、多くの人は「テロ」「イスラム国」「シリア内戦」などのネガティブで危険なイメージを思い浮かべるのではないだろうか。実際にヨルダンの周囲はパレスチナ問題やシリア内戦、イラク戦争などの影響で未だに不安定な地域が多い。しかしヨルダン国内は安定しており、紛争による難民の受入れ先としてだけでなく、不安定な地域の緩衝材としても重要な役割を果たしている。今回はそんな中東の国、ヨルダンについて紹介したい。

国土と気候

ヨルダンの国土面積は北海道と同程度の8.9万km²だが、その地形は地域によって大きく異なる。国土の大半は砂漠や岩山の連なる乾燥した地域で、時にはテレビで見るとような砂嵐が発生し、巻き込まれると数時間は視界ゼロに近い状況となる。

一方で西部はヨルダン渓谷と呼ばれる窪地となっており、冬でも比較的温暖な気候とヨルダン川を利用した灌漑により農業が盛んな地域となっている。ヨルダン渓谷の標

高はマイナス200～400mと海面より低く、最も低いところに有名な「死海(Dead Sea)」がある。塩分濃度が海水の10倍にも及び、泳げない人でも浮いてしまうという不思議な湖である。湖畔にはリゾートホテルが建ち並び、多くの観光客が訪れる人気の観光地となっている。

気候は想像していたとおりの「乾燥した灼熱の大地」で、夏季の約4カ月間は一滴の雨も降らない。この期間は本当に乾燥が厳しく、喉や肌の手入れは欠かせないが、日本の夏のように蒸し暑い熱帯夜がないた



写真1 巻きあがる砂嵐



写真2 農業が盛んなヨルダン渓谷

め過ぎしやすい。逆に冬季は冷え込みが厳しく、アンマンでは積雪を記録することもある。イメージに任せて冬服を持っていかないと凍えることになる。

首都アンマン

砂漠地帯とヨルダン渓谷の間の丘陵地帯に広がっているのが首都のアンマンである。その歴史は非常に古く、昔ながらの街並みが残る旧市街にはローマ時代の遺跡も点在している。反面、近代的な建物や巨大なショッピングモールもあり、外資系のホテル、スーパーマーケット、ファストフード店が多く進出している。外国人観光客も多く、中東を代表する大都市である。

アンマンで印象的なのが、丘に沿って白い外壁の家が建ち並ぶ光景である。建物の外壁に規制を設けて景観を守っているとのこと、青い空と白い外壁のコントラストがとても美しく、訪れる機会があればゆっくり眺めてもらいたい。

都市圏の人口が約250万人を数えるアンマンだが、公共交通機関は未発達でバスやタクシー以外の移動手段がなく、また渋滞も多い。さらに運転マナーが非常に悪く、事故も多いので街歩きには十分な注意が必要である。自動車が歩行者に対してパッシングした場合、日本では「お先にどうぞ」を意味することが多いが、ヨルダンでは間違いなく「邪魔!こっちが先!」という主張なので、気を付けなければならない。

ヨルダンの資源

中東といえば「原油が豊富である」と、例外なくヨルダンも産油国と思う人が多いだろう。しかし残念ながら原油は出さず輸入に頼っており、ガソリン1ℓが約160円と日本よりも



写真3 青い空と白い外壁の家々が並ぶアンマン郊外

高価である。

そして深刻なのが「水」である。乾燥した国土で大きな河川などの水源もないため、慢性的に水不足となっており、水道水の供給が滞ることもある。勤務先であるアンマン郊外の事務所内の水道が出ないこともあり、特にトイレの水が出ないなどで困った経験も多い。こういった背景から、ヨルダンには「水灌漑省」という省庁があり、水問題を重視していることが伺える。

イスラム文化圏での生活

ヨルダンではイスラム教徒が9割以上を占め、街の至る所にあるモスクから1日5回、礼拝のお知らせが拡声器にて大音量で流される。今では慣れたが、赴任当初は早朝のお知らせに驚いて目が覚めてしまったものだ。そんなヨルダンではあるが意外に他の宗教に対して寛容で、キリスト教徒も存在する。街で「イスラム教徒か?」と聞かれることがあるが、仏教徒や無宗教と答えても嫌な顔をされる訳でなく、ましてやイ



写真4 「水は大切に!」と思われるポスター

スラム教への改宗を迫られる訳でもなく、単純に東洋人に興味があって聞いてみたという感じであった。

イスラム教と言えば、豚肉を食べることや飲酒の禁止といった厳しい戒律が思い浮かぶのではないだろうか。豚肉についてはアンマン市内の中華料理店に行けば食べられるものの、外資系ファストフード店では豚肉を使ったメニューはなく、スーパーマーケットでも販売されていな



写真5 評価の高いヨルダン産ワイン



写真6 おもてなし好きの野菜売りのおじさん

いため食べるまでには苦勞を要する。一方で飲酒についてはかなり寛容に感じる。スーパーマーケットや酒屋ではビールやワイン、ウイスキーなどを買う事ができ、レストランやバーなどでは飲酒可能な場合も多い。ヨルダンではビールやワインの製造もおこなっており、ヨルダン産ワインの評価は高く、空港やショッピングモールなどで気軽に購入できるので、お土産としてもお勧めである。

当初は日本になじみのないイスラムの世界に戦々恐々であったが、ラマダン(断食)期間に人前で飲酒するといった無神経な行動をとらなければ大きな問題にはならないのではないかと。

日本との関係

ヨルダンは正式名称を「ヨルダン・ハシミテ王国」といい、王室が存在する。そのヨルダン王室と日本の皇室が良好な関係を築いていることから、親日国であると言われていた。しかし、市民レベルでは地理的に東アジア地域より欧米との繋がりが強いので、友好的ではあるが

日本の文化等についてはあまり知られていないように感じる。

例えば海外で人気の和食だが、ヨルダンでは一般市民に浸透しているとは言い難く、外国人や富裕層の行くレストランでないと食べられない。その和食にしても、甘い味付けのご飯の上にカニカマを載せた「寿司に似た何か」といったものも多く、がっかりさせられることがある。醤油はスーパーマーケットで買えるが、味噌やみりんといった調味料の入手は難しく、和食を求めるには厳しい環境となっている。

そのような中、一番身近な日本と言えば自動車だろう。アンマン市内を走る自動車の3~4割を日本車が占めており、ミニバスなども日本製が多い。

ヨルダン人のスタイル

「中東ではターバンを被るのか」とよく聞かれるが、むしろヨルダンではターバン(正確にはカフィーヤと呼ぶ)を被って白い民族衣装を着ている男性の方が少数派である。日本人がみんな和服を着ている訳で

はないのと同様で、多くがジーンズにシャツといったラフな服装をしている。

女性の服装も同様で、全身黒づくめのアバヤという民族衣装を着ている人は少なく、特に若い女性はスニーカーやブーツにジーンズ、長袖シャツといった自由でカジュアルな格好が目立つ。宗教上、ヒジャブと呼ばれる布を頭に巻いて髪を隠しているが、そのヒジャブにしても花柄やラメ入りなどを使い、巻き方も数種類を使い分けてお洒落にしている。女性の写真を撮るのは失礼な行為であるため、お見せできないのがとても残念でならない。

おもてなしの心

大柄で彫りの深い顔立ちのため見た目が怖そうなヨルダン人であるが、基本的にフレンドリーで「おもてなしの心」を強く持っている。東洋人が珍しいこともあるだろうが、気さくに話しかけてくれるだけでなく、時にはお茶などをごちそうしてくれることもある。

以前、道端で野菜を買おうとした

ら、野菜売りのおじさんにご飯をごちそうになったことがある。日本人と聞いておもてなしの心に火が点いたのだろう。アラビア語はほとんど分からないが、相手の気持ちが分かりとても嬉しかった。また先日は、事務所の鍵が壊れてドアが開かずに困っていたところ、隣の会社の人々の好意により助けを得て、てんやわんやの末に何とかドアを開けることができた。困っている人をほっておけない世話好きな一面もあるようだ。

そんなヨルダンの人に驚かされるのは時間に対して大らかな人が多いことで、注文したランチが2時間も遅れて届くなどの経験も多い。そのような時は「アラビックタイム」と苦笑いしつつも割り切って、大らかさを受け入れるようにしている。

ヨルダンの国民食

お祝いの席や一族が集まった時に食べられる「マンサフ」は、ヨルダンのソウルフードと言って差し支えないだろう。大盛りのサフランライスの上にヨーグルトで煮た羊の肉を載せて、ヨーグルトスープをかけて食べる料理である。羊の肉は崩れるほど柔らかく煮られていておいしいが、ヨーグルトスープはクセが強く苦手という日本人が多い。店によっては食べやすいスープの味もあるので、いろいろ試してみると良いだろう。ヨルダン人は本当にマンサフが大好きで、現地スタッフとレストランに行った際に「好きな物をごちそうするよ」と言ったところ、全員がマンサフ一択であった。

絶品スイーツとフルーツ

基本的にヨルダン人には老若男女問わず甘党が多く、大柄で髭面の男達がスイーツを食べつつ談笑す



写真7 ヨルダンのソウルフード「マンサフ」



写真8 注文すると切り分けてくれる「クナーファ」



写真9 1個200円程で食べられる赤肉メロン

る姿は何とも微笑ましい。大抵のスイーツは小麦粉とナッツ類にシロップをからめて作られており、驚くほど甘い。

中でもお勧めは「クナーファ」である。チーズに載せた小麦粉の生地をシロップを和え、砕いたナッツを散らしたスイーツだ。サクッとした生地に甘いシロップがからみ、チーズの酸味とトロリとした食感がなんと贅沢な一品である。1切れ100円程とお手軽価格なので試してみたいが、高カロリー必至なので食べすぎには注意されたい。

また、ヨルダンは果物が充実しており、おいしい物が安く手軽に手に

入る。感動したのはトラックの荷台に無造作に積まれた1個200円程のメロンで、切ってみると極上の赤肉メロンであった。日本であれば数千円はするであろう赤肉メロン、もちろん毎日食べ続けたことは言うまでもない。

覆ったイメージ

当初はイスラム圏での生活に不安が大きかったものの、気さくで親切な人が多く、イメージが大きく覆ったヨルダン。日本から直行便がなくアクセスは大変だが、ペトラ遺跡などの有名な世界遺産もあるので、機会があればぜひ訪れて欲しい。